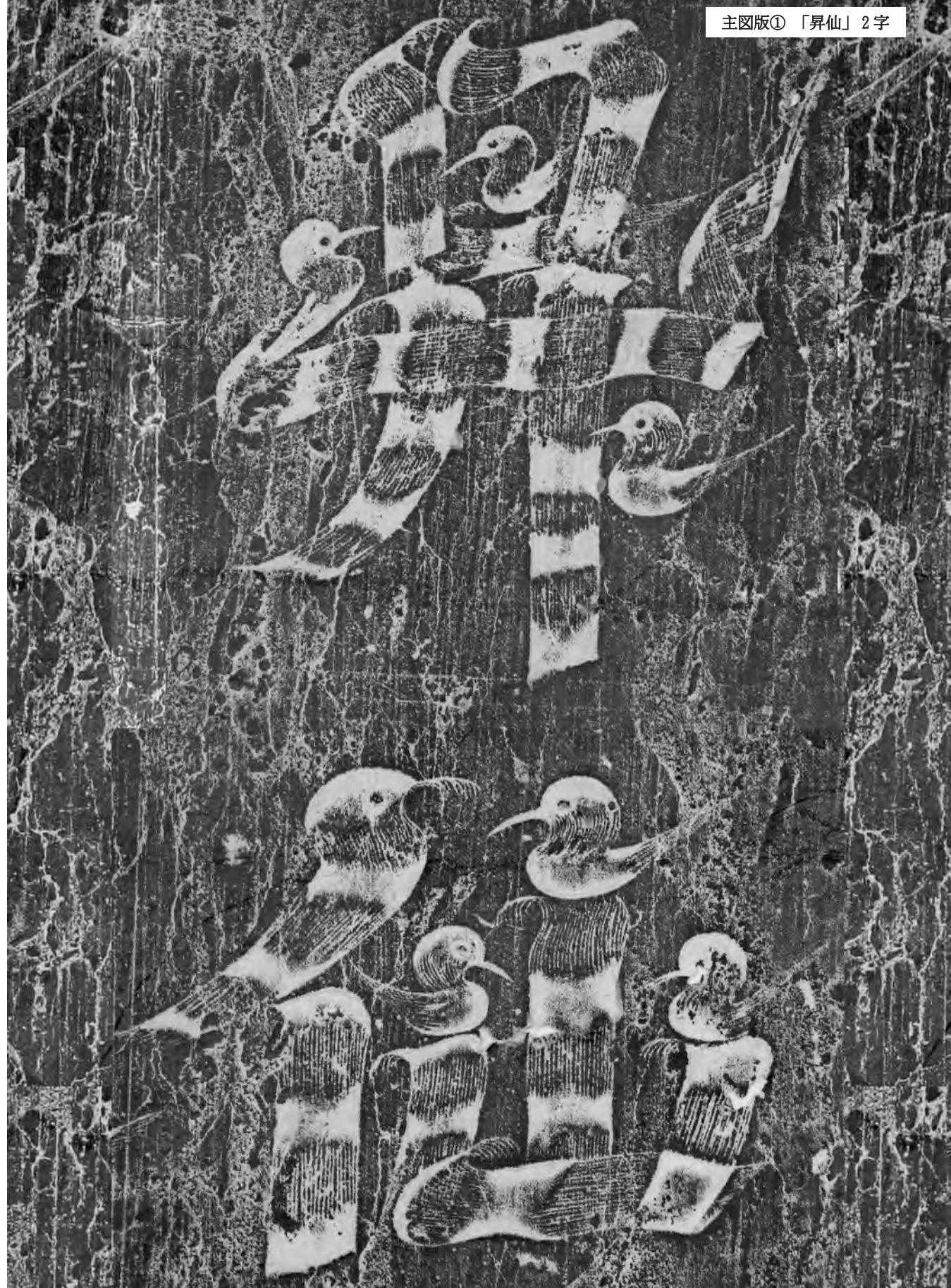


主図版① 「昇仙」 2字



# 書体鑑賞・「飛白体」② 『昇仙太子碑・碑額』 唐時代・聖歴2年(699)

図版③ 原碑



図版② 碑額全体



図版④ 碑文本文

巻末紀年

卷頭題記



則天武后は、中国史上唯一の女帝として有名である。7メートル近い巨大な「昇仙太子碑」は、則天武后的筆である。河南省洛阳市の東南、偃師市に当時のままの位置に、碑文もほとんど壊されることもなく保存されている（図版③）。この碑の本文は、34行、毎行66字、2000余字であり、碑額の「昇仙太子之碑」の6文字は、実に愛らしい飛白体である（図版②）。右頁の主図版①には、最初の「昇仙」の2字を示した。やや行書体であるが、構成する文字の点画は、刷毛のようなもので書かれた線質を示している。点画が細かに割れ、波打つ様な筆勢を示している。更に見事なのは、点画の起筆部分を小鳥の形にしていることである。「仙」の字には、人偏の第1画を大きく親鳥風に書き、右側の旁の「山」の各縦画の起筆の上に小鳥を3羽、1羽は親鳥と同じ向きで、右側の2羽は、親鳥に向きあうように構成されている。巧みな装飾技法である。「昇」字には3羽、「太」「之」「碑」字は各1羽、「子」には使われていない。全部で10羽を見ることができる。このような装飾性をえた飛白体が、漢時代の宮殿の題署や城門の門額などに使用されたと伝えられているが、現在は見ることができない。最後に「昇仙太子碑」の本文の書風は、行草体である。行書、草書が混在し、草書に一部章草体が用いられている。第1行目卷頭「昇仙太子碑 并序」の下の「大周天冊金輪聖神皇帝御製御書」と末行の「聖歴二年歲次己亥六月甲申朔十九日壬寅建」の楷書体題記（則天文字が用いられている）は薛稷の書と伝えられている（図版④）。

伊藤滋 メールアドレス  
mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

# 書道芸術院

## 平成の群像 (2015)

2014年春洋会四人展出品作  
「我」

136×97cm



崎 井 恵 風



### 一人の師

川崎梅村（白雲）先生との出会いは、高

校の書道の先生からの紹介でした。無我夢

中の五年間でしたが一生書の道を歩みたい  
と思う深遠な魅力を授けていただきました。  
「書は人なり」まず自分自身を磨け。そ  
の人の生き方、生きざまが書に現れてくる

と。

「長生きせよ」味のある字が書けるのは  
晩年80才位になってからだ。貫名松翁の代  
表作もその頃のものが多いと。川崎先生ご  
自身もこの言葉を実践されました。

川崎先生が旅に出られた後、手を差し延  
べて下さったのが恩地春洋先生です。恩地  
先生もあまり多くは語られず、型にはめよ  
うともされません。自ら学び・考え・悟れ  
と。

「その色に映け」がいつもおっしゃる言  
葉です。じっくりと各人の成長を見据えて  
要領よく作品づくりをする姿勢を戒めてお  
られたんだと今になって解ります。この教  
えは、子育てにも通じると実感しています。

できないからとすぐ手を出すのは簡単です  
が、できるまで待つ難しさを。いつもヤキ  
モキしながら見守って下さっておられるん  
でしょうね？

私は一人の立派な師に恵まれ、この道を  
歩んでこられた幸せに感謝です。



## 現代詩文書 (四)

田 村 鄭 雲



大作の揮毫に対し多くの応援をいた  
だきました。

1回目 8月20日 体育館、紙貼り

雑務応援8名 10枚揮毫

2回目 9月3日 体育館、応援8名

10枚揮毫

3回目 9月16日 民宿 応援6名

「金屏風に書くつもりで」と勵  
まして出来た作品です。  
紙を貼って頂いたり、道具  
を移動して頂いたり多くの方  
にお世話になりました。感謝  
に堪えません。

紙面を前にして

用意して頂いた大きな、この真っ白な紙には何も無いのです。私が墨を受けたとたん価値の無い粗大ゴミになります。その駄作に応援の方が落胆する姿が浮かんだります。この不安と雜念を払い、集中する事が大変でした。

展示の作品は最後に書いた1  
作となりました。辻元先生に  
「金屏風に書くつもりで」と勵  
まして出来た作品です。

紙を貼って頂いたり、道具  
を移動して頂いたり多くの方  
にお世話になりました。感謝  
に堪えません。

## 21世紀の書 —私の主張—



SIN一心一

太田蓮紅書

## 前衛書 (四)

太 田 蓮 紅

### 心の表現—転機の書—

一生涯の間で何度か転機と称  
する時期に出合うようである。  
出合いは衝撃的なものから、じ  
わりとやつて来るものまでさま  
ざまである。大きな喜びがあつ  
たり、悲しみや挫折・失望など  
心に深い傷を残すこともある。  
良きにつけ悪しきにつけ心に大  
きな衝撃を受けた時、心の奥底  
が揺さぶられ感情が沸き上がつ

てくる。溢れる感情を素直に受け止め、  
紙面にぶつけることによって線は微妙  
に変化しながら走り出す。線の不可思  
議さであり、書の変貌である。紙面に  
は作意のない真の姿が誕生する。前衛  
書は心の表現であればこそ、心の変化  
やありさまを多様な形態で発信するこ  
とが求められるのである。転機を乗り  
越え新たなチャレンジャーとして、次  
の世界を切り開く必要があると思った。  
どれだけの人に理解してもらえるか未  
知数だが、常に前に進みチャ  
レンジする熱い心を持つた  
書でなければ前衛書ではな  
いのかも知れない。

掲載の作品は、第65回記

念書道芸術院展出品作。東

日本大震災で経験した出来  
事、自然の驚異に対する怒  
り、衝撃、悲しみ、挫折感  
などの心の変動を、直・側  
筆でのたうち回った黒を基  
調とした作。濃墨に心の闇  
の深さと渴筆にやり切れな  
い焦りと怒りを表現した。  
これまで踏み込まなかつた  
図象表現の世界である。心  
に刻まれた残影をどのように  
表現するかによって傾向  
が変化してゆくことを確信  
した作品でもある。

平成27年度 新審査会員作品

小川白柳（漢）・田村玲子（か）・鈴木翠夢（現）・大町菜円（前）



小川白柳  
(千葉)

「悠然得一佳趣」

この度は、審査会員にご推挙いただきありがとうございます。三浦扇銘先生、鄭銜先生の真摯で、そしてユーモアをまじえた御指導、書道仲間との楽しい時間が、より書道を楽しいものにしてくれました。



田村玲子  
(群馬)

「小春日」  
この度の、審査会員へのご  
推挙に深く感謝申し上げます。  
これまで故下谷東雲先生、  
下谷洋子先生に導かれ、社中の  
皆様に励まされて歩んで参  
りました。かなは、私にて  
て広く深く遠い憧れの世界、  
心新たに学び続けたいと思  
います。この作は、大きな余白  
による現代性をねらいました。



大町菜円

「翼」



大町菜田  
(広島)

この度、審査会員に昇格させて頂き、  
またご指導下さいました大勢の先生方に  
心より御礼申し上げます。今後も、  
もっともっと羽ばたきたいという気持  
ちを込めて翼という字を作品に致しま  
した。



「あぢさるや天地有情の碑は雨中うちゅう」

自作句



「あぢさるや天地有情の碑は雨中」  
自作句  
「晩翠草堂前」というバス停に土井晩翠の「天地有情」の大きな碑があります。今回は自作の句を情景を前面に出し、余白の美しさを心掛けて書いてみました。  
感性を磨いて、これからも精進して参ります。加藤白柳先生はじめ宮城野書人会の先生方、書友の皆様に感謝申出します。(翠夢)

感性を磨いて、これからも精進して参ります。加藤白柳先生はじめ宮城野書人会の先生方、書友の皆様に感謝申書します。（翠夢）

「**晩翠草堂前**」というバス停に土井先生が  
晩翠の「天地有情」の大きな碑があります。  
今回は自作の句を情景を前面に  
出し、余白の美しさを心掛けて書いて  
みました。

第33回

日本詩文書作家協会書展  
俳句と書の世界



片山由美子「風鈴の鳴りさうな風来て鳴らず」 辻元大雲書



長谷川権「みちのくの山河慟哭初桜 他」 飯高和子書



大島知津「木蓮やガラムマサラの匂ふ夜」砂本杏花書

会期 平成27年6月9日（火）～14日（日）

会場 セントラルミュージアム銀座

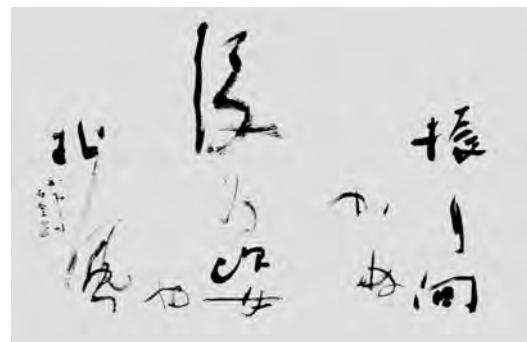
主催＝日本詩文書作家協会 後援＝毎日新聞社・全日本書道連盟

千葉かん二「梅雨晴れや叙勲の謝辞にピタゴラス」

浜田堂光書

梅雨晴れや叙勲の謝辞にピタゴラス

千葉かん二句



赤木ふみを「振り向かぬ後ろ姿や北風」 小竹石雲書



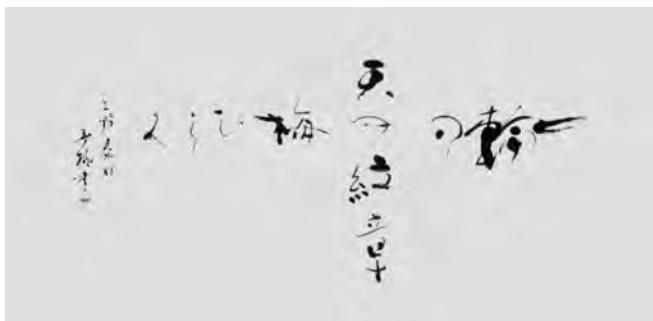
水原秋櫻子「黄鶴や澤邊に多き蘿の座」坂本素雪書

種田山頭火「あをあをと竹の子の皮ぬいでひかる」大平邑峰書

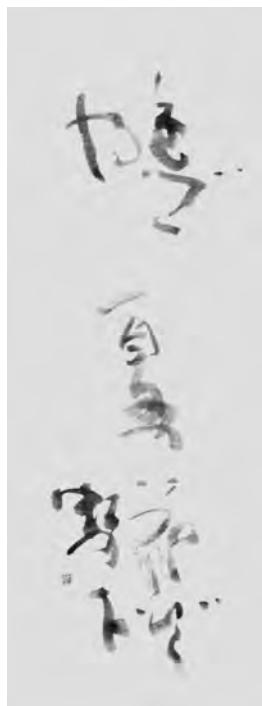


藤田美和子「貝殻の耳寄せ春の波の音」上村棠芳書





上野 泰「一輪の天の紋章梅ひらく」 佐藤無極書



尾形澄神書



鷹羽狩行「白馬駆け下るごとくに滝の水」 田村鄭雲書



種谷萬城書



山田眞佐子「龍となり連風雨の神探す」 山田梓江書



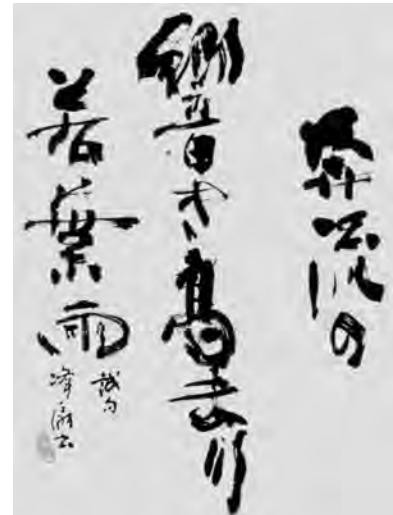
小林一茶「夕月や鍋の中に鳴く田螺」大内熒軒書



細見綾子「リラ咲いて雲の淡きも旅なりし」小野由紀書



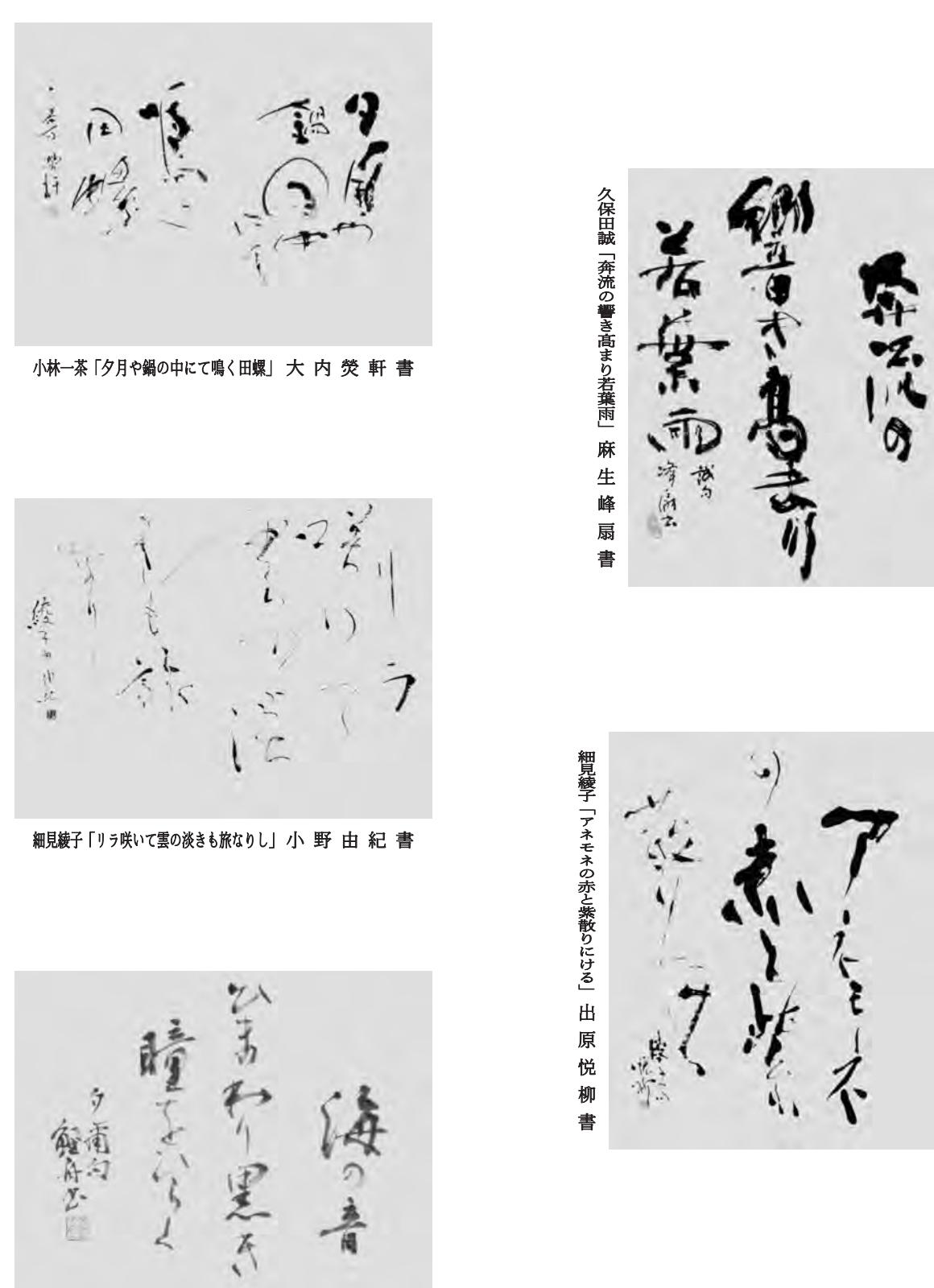
木下夕爾「海の音ひまわり黒き瞳をひらく」川崎鯉舟書



久保田誠「奔流の響き高まり若葉雨」麻生峰扇書



細見綾子「アネモネの赤と紫散りにける」出原悦柳書





黒千枝里「芭蕉林雨うちにけり圓舞曲」 武山 櫻子 書

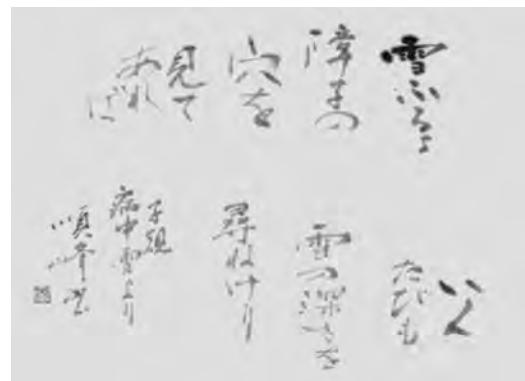
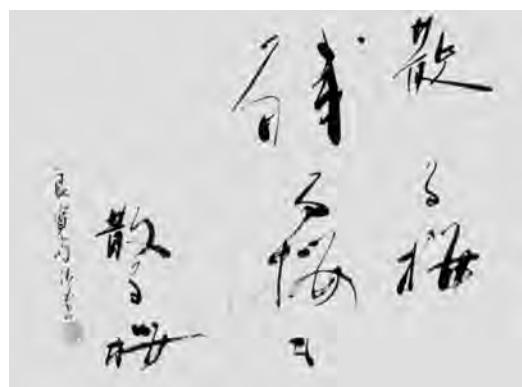


自詠「惠風ほらやさしい風があなたへ」 三宅 佳峰 書



新倉和子「あめんぼう水面に浮ぶ雲に乗る」 宮原香扇 書

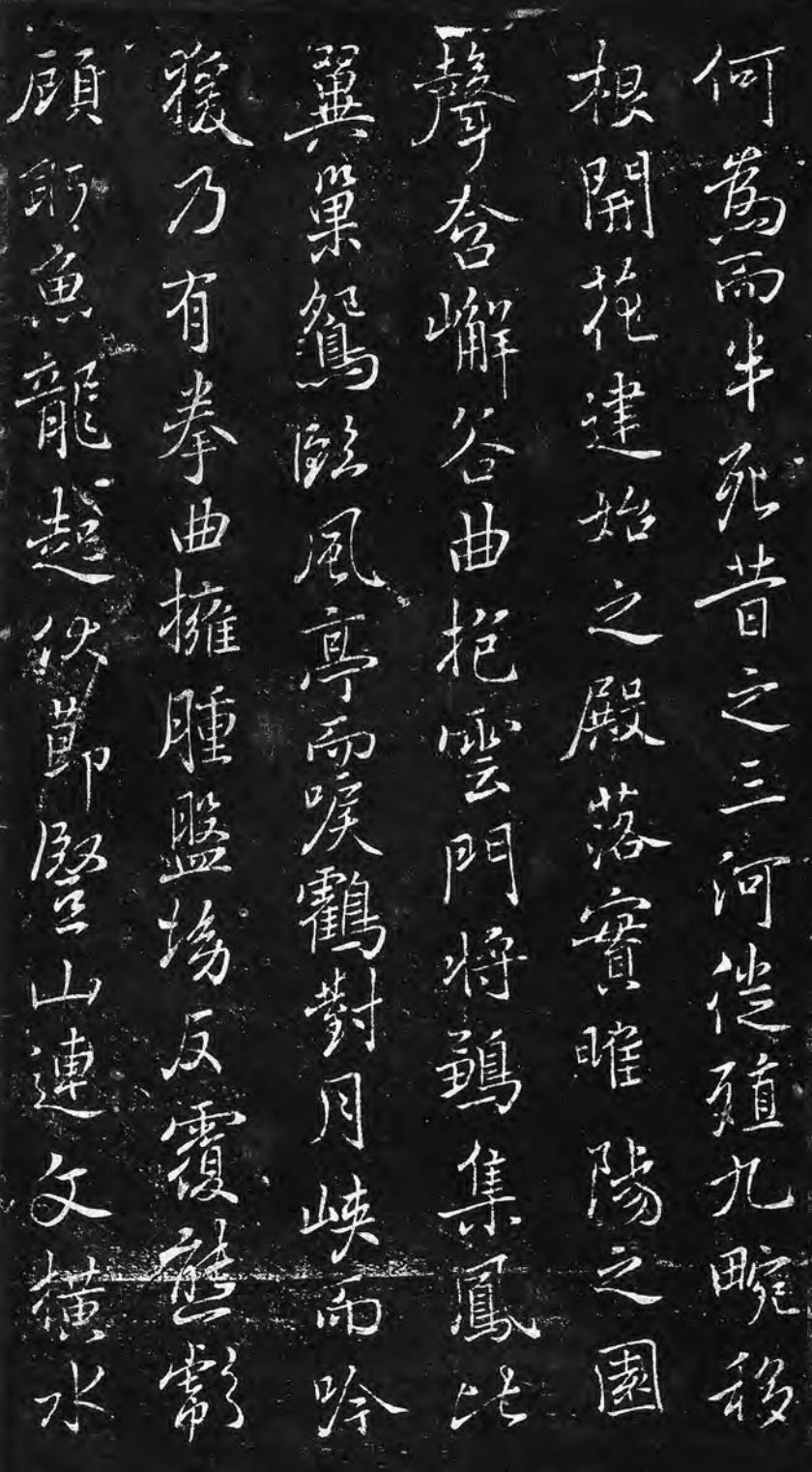
特集：日本詩文書作家協会書展



△院関係出品者名▽

辻元大雲・飯高和子・砂本杏花	小竹石雲・浜田堂光・坂本素雪
上村棠芳・大平邑峰・尾形澄神	佐藤無極・種谷萬城・田村鄭雲
山田梓江・麻生峰扇・出原悦柳	大内熒軒・小野由紀・川崎鯉舟
國府田権翠・武山櫻子・西山珠香	三宅佳峰・宮原香扇・山崎掃雪
岩崎陽光・大野清玉・金濱珀燐	木村順峰

## 枯樹賦（褚遂良）①



(75%縮小)

何爲而半死。昔之三河徙殖。九畹移根。開花建始之殿。落實睢陽之園。聲含嶺谷。曲抱雲門。將鶴集鳳。比翼巢鷺。臨風亭而唳鶴。對月峽而吟猿。乃有拳曲擁腫盤湧反覆。熊彪顧眄魚龍起伏。節堅山連文橫水。

〔解説〕枯樹賦は北周の有名な詩人、庾信（513～581）が作った全467字からなる漢詩の賦（漢詩の一體、漢以後さかんになった）である。内容は東晋の殷仲文が庭の樹木の衰枯をみて人生の無情を嘆く様子を表現し、みずから異郷の地にある悲哀を盛り込んでいる。この枯樹賦の末尾には「貞觀四年（630）十月八日。燕國公の為に書す」とあるのみで褚遂良の署名はない。しかし、唐代の徐浩の

〔古述記〕に「遂良の枯樹賦」との記述が存在することや、その書風から褚遂良（596～658）の書とされている。褚遂良35歳のときの書で、現存する褚書中、書写年代のもっとも早い優れた行書である。線に粘りがあり、抑揚緩急をつけた運筆の妙がみごとに表現されている。

(編集部)

※落款を必ず入れる  
署名、もしくは  
○○臨  
(押印のみも可)

## 特別研究部臨書課題

II (毎日展公募サイズ以内・縦横自由)

当該古典の左記掲載部分以外也可。

## 漢字研究部臨書課題

II (半紙普通判・縦使用) 左記の法帖より何文字臨書してもよい。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

よみ  
はかなしとまさしく見つるゆめのよにおどろか  
ひたぶるにわかれし人のいかなればむねにと  
あさましのよはやまかはのうづなれや心ぼそ  
くもおもほゆるかな

まれる心地のみする

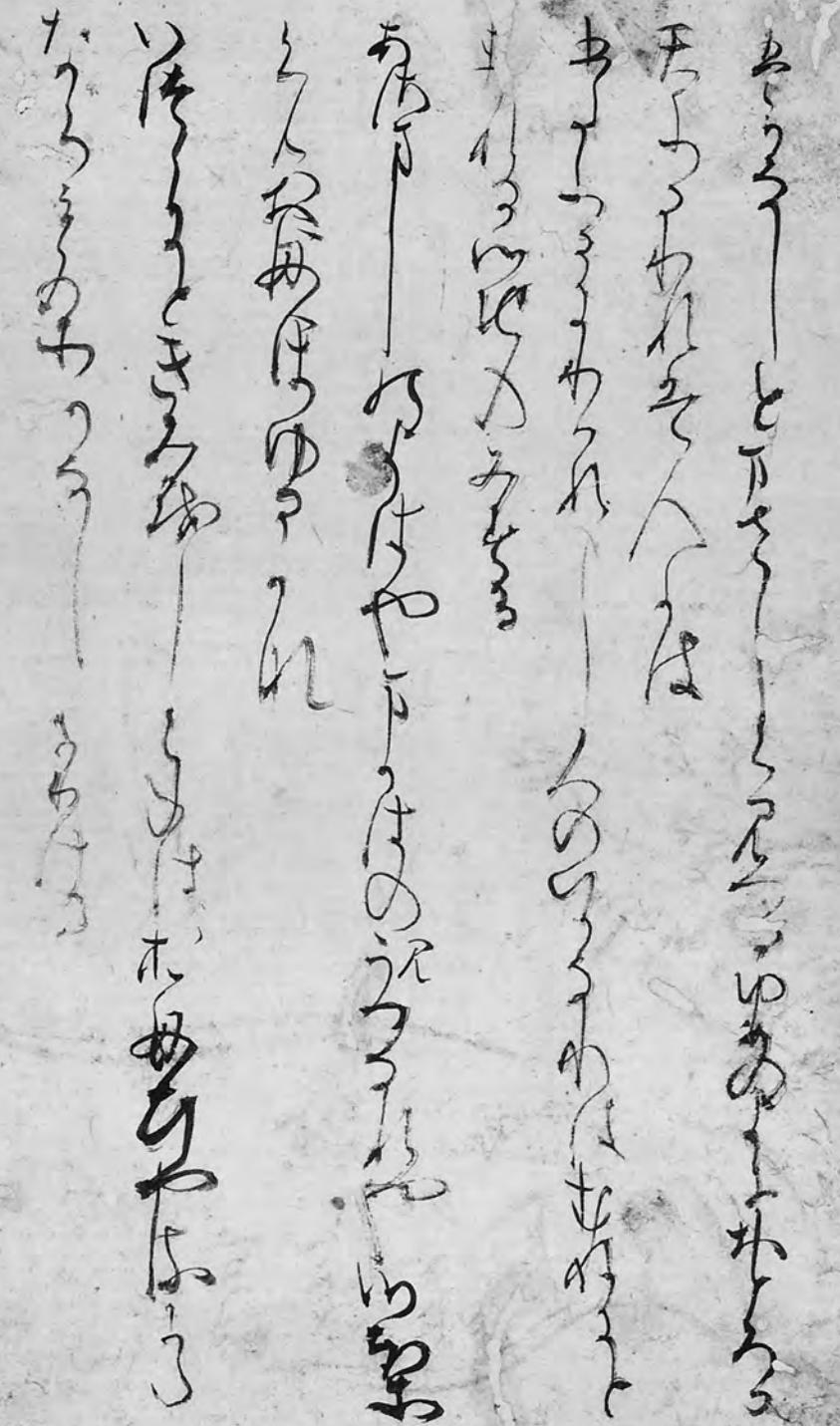
## かな研究部臨書課題

II (毎日展公募サイズ以内・縦横自由) 左記の掲載以外も可。  
(半紙普通判(料紙可)・縦長に使用)  
別紙を裁断して貼付も可。半纏紙は半紙サイズに切って使用のこと。  
左記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

〈解説〉「和泉式部集」は平安時代の歌人、日記文学作者である和泉式部(生没年未詳)の家集。現存する「和泉式部集」は、正集、続集、宸翰本、松井本(国文学者松井簡治旧蔵)等からなる。

伝藤原行成筆「和泉式部集切」は、書風が2つに分かれ、いすれも「和泉式部続集」を書写しているところから、それぞれ「和泉式部続集上巻切」「和泉式部続集下巻切」と呼ばれている。書風は、上巻切が小粒でまろやかな文字を流麗に書写されているのに対し、下巻切は上巻切よりも字粒が大きく、運筆はさらにおらかである。11世紀末から12世紀初頭にかけての書写と考えられる。(編集部)

※掲載上の都合により左の余白部分を省略しています。



原寸。

習い方解説 (四)

小竹石雲



筆精妙入神  
(筆は精にして妙は神に入る)  
落ち着いたなかに明るさ清らか  
さを表現してみた。

◎注意点

- ・全体的には紙面に対し各々の字をやや小さめに書き余白を広めにした。
- ・緩急抑揚の変化を十分につけて、明るくなるように心がけた。
- ・筆先が立ち上がるまで待ってどこまでも続けて気持ちをこめるように呼吸長くして書いた。
- ・「筆」出だし軽く静かに「事」長い横画に抑揚の変化をつけ軽快に。
- ・「精」明るくなるように偏と旁を少し離した。
- ・「妙」太細の変化を十分つけて活発な表現を心がけた。
- ・「入」1画目は筆先で押しこむような細線で長く、2画目は太く細かめ。
- ・「神」最終画を沈めた渋い線でまとめた。

筆精妙入神 よみ(筆は精にして妙は神に入る)

書体=自由

習い方解説 (四)

大隅晃弘

天何言哉  
(天何をか言うや)  
(論語)



書体＝楷書

これまでに、古典の引用は創作の有効な手段だと述べてきましたが、倣書そのものが創作であるという考え方には、少々課題が残る学んだ古典の定着を目的とした学書過程という意味合いが多分に含まれています。意図する表現に対して、古典の要素をどう昇華し、創作の中に引用していくのか。作家としての、主体的な視点が重要なと考えます。

鍾繇の薦季直表を参考に書作しました。愛らしい扁平な造形、転折や波法の柔軟な用筆等は何時見ても飽きることがありません。川村驥山の「醉古堂劍掃譜」は、鍾繇の風でありながら、作者の主体的な解釈によって生まれた現代の楷書です。

大辻 多希子

夏の月すずしく照れり我は聞く  
云はぬ心の限りなき声  
(窪田空穂)

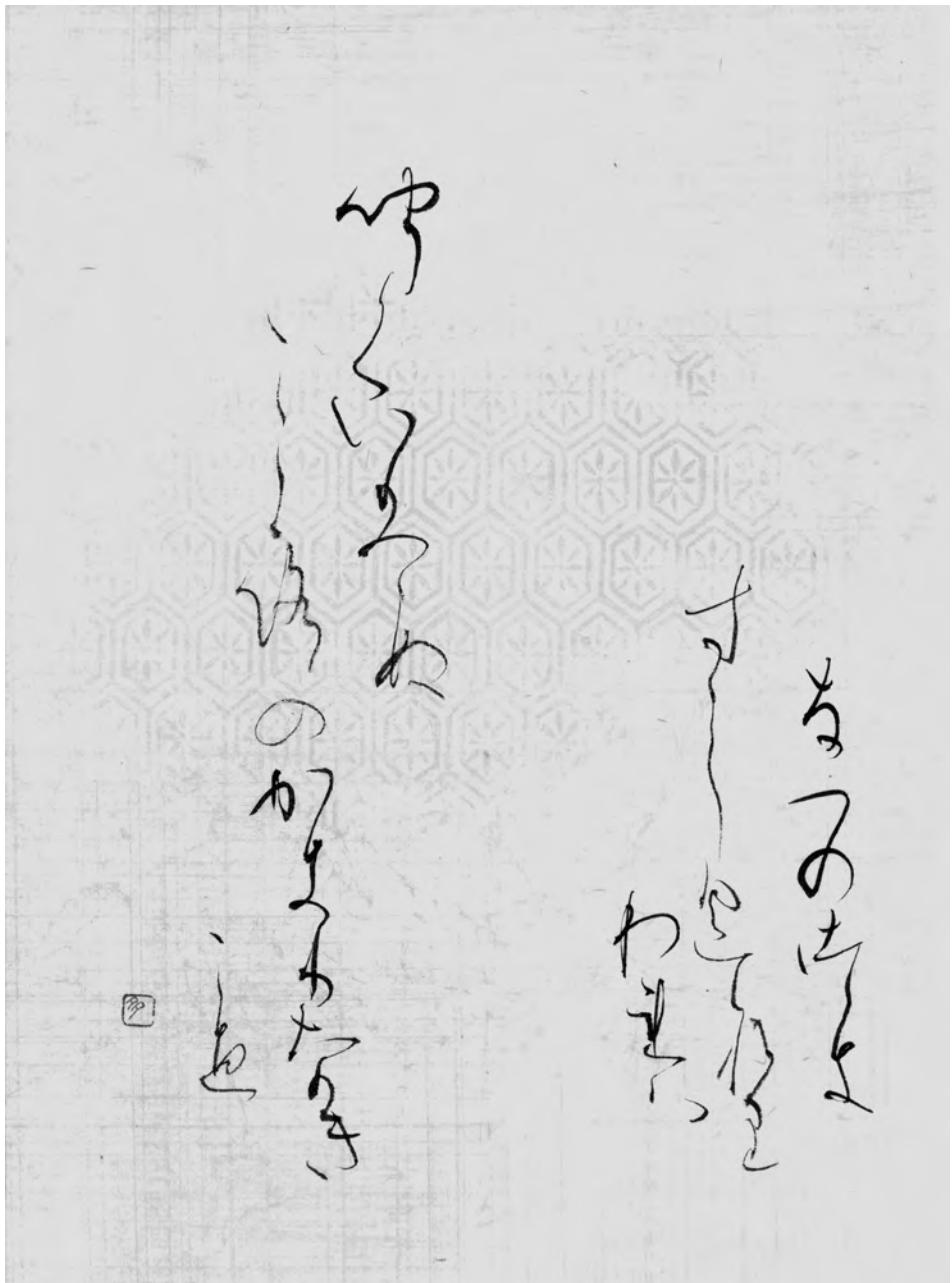
単体形であるかなは連綿が必要です。連綿により流麗な表現ができます。

作品を書く時、連綿の息継ぎはどうにしているでしょうか。

連綿は1文字ずつを書く意識よりも、線を組み合わせる気持ちで書きます。

1文字ずつを書いてそれをつなぐのではなく、息を継ぎたしながらつづけます。

前の字の最終画から次の文字の1画まで、ゆるめずにつづけます。  
(2文字目が1画で終わるときはその次の文字の1画目まで)  
つづけるためには、どこで切るかということを見極めることも大切です。



創作

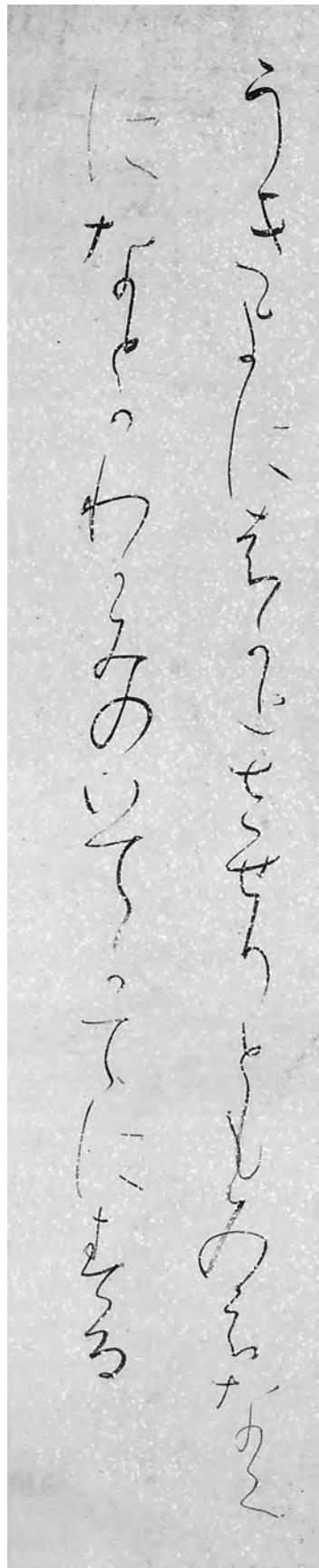
よみ方 な(奈)つの(つ(徒)き(支)すゝしく(具)てれり(里)われ(連)は(ハ)聞く(久)

いは(盤)ぬこゝる(路)のかぎ(支)り(利)なきこゑ(思)

かな規定 秀級以下 【八月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$  (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全體、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種  
(掲載写真縮小93%)



よみ方 うきよには(者)か(可)どさせりともみえなく(久)  
になどか(可)わが(可)みのいでが(可)てにす(春)る

### 習い方解説 (一)

善養寺 紅風

玉よりも美くしければ涙ぞと  
さだめぬ夏の山の清水を

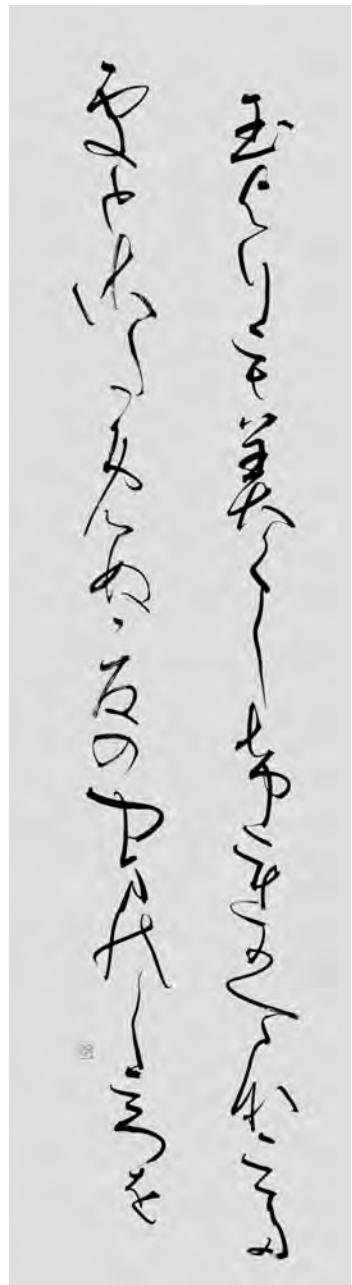
(手謝野晶子)

大字かなの一一般的な2行書きです。息の長い連綿を、1行目と2

行目に取り入れました。含墨した  
ら墨量に応じ、リズムにのって、  
力強く運筆して下さい。行の終り  
は、画数が少ない文字を入れ軽快  
感を出しました。自在に変換をして  
て作品の表情も演出して下さい。

創作

よみ方 玉よ(母)りも(毛)美く(久)しけ(希)れ(運)ば(盤)な(那)み(二)だ(多)  
ぞ(處)とさ(佐)だ(多)め(免)ぬ夏のや(也)ま(万)の(能)しみ(二)づを



漢字条幅規定 初段以上 【八月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

崎井 惠風 選書

習い方解説 (四)

崎井 惠風



夏雨染成千樹綠暮風散作一江煙  
(夏雨染成千樹の緑、暮風散じ作す一江の煙)  
(錢惟善)

書体=自由

夏の雨は樹々の緑を蘇らせ、夕暮の雨は川一面にもやを敷く。元から明時代の錢惟善の詩です。雨に洗われた鮮やかな緑と、煙なびくようなもやが川面を覆う夕暮の情景が浮びます。ぜひ書作してみたいと選んだ課題です。美しい流れでスケールの大きい作品に仕上げてください。

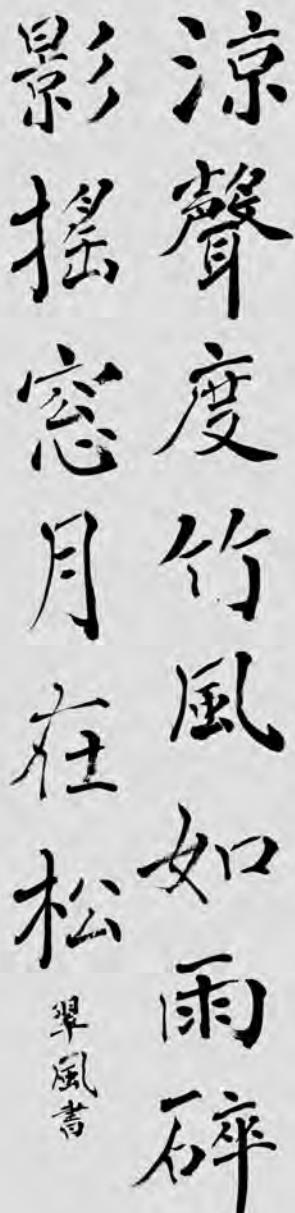
\*たて形式に限る

### 習い方解説 (四)

最首翠風選書

漢字条幅規定 秀級以下【八月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切

最首翠風選書



涼聲度竹風如雨  
(涼聲は竹を度り風雨の如く)

碎影搖窓月在松  
(碎影は窓を搖し月松に在り)

(文徵明)

書体=自由

書でも知られる文徵明は詩人としても有名です。  
——竹林を吹き渡る風声は雨の如く、窓に映る松影は碎け動いて、月が松にかかっている——の意。  
雁塔聖教序を目にうかべ、楷法で涼しげに書いてみました。筆鋒のバネを効かせ細くて弾力のある強い線をと念じながら。

牧 泰濤

空に虹を見るとさく  
わが心は跳る。  
物心つゝてからそうだつたし  
大人になつた今もうだ。  
頼わくば、老いてからも  
変わらないでほし。泰濤書

「わア、虹だア」と空を見上げて叫んだ幼い頃を誰も経験していることだろう。自然現象の物理は解らなくとも自然の不思議な創造力に人々驚いたものである。自然派詩人といわれる英国の詩人ワーズワースの言葉である。他に「自然是、それを愛する者を裏切つたことはない」とも。自然を愛するとは一体どんなことなのか。今の私達の生き方を問うてている。

人間、いくつになつても、「虹を見て心跳る」ような純な心を持ち続けたいものである。筆を持った時も、虹を愛する、自然を愛するような優美あふれる作品書きたいものである。

※落款を必ず入れる。  
(自分の名前を入れること)

用紙=はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

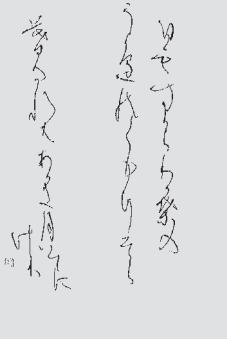
書体=自由

今月の

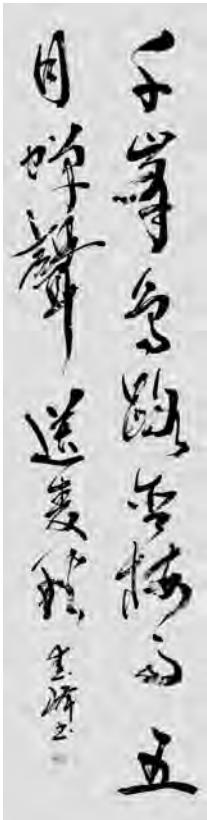
# ホープ作品 各部総評

No. 649

かな部 師範 阿久津隆華  
自然な構成を変化に富んだ筆致  
で表現した力量は見事です。この  
上は墨量変化の研究を望みます。  
◎かな部総評 参考手本をよく学  
び、個性を加味した作目立ち好感  
が持てた。過剰表現も一部あり残  
念。省略を研究のこと。(明子評)



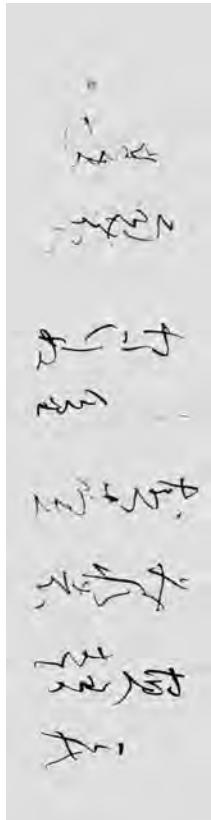
かな条幅部 師範 大和由紀江  
歌意に添った用紙に墨色も美し  
く、穏やかな筆致が優麗です。後  
半や動きが小さくなり惜しい。  
◎かな条幅部総評 上段者は墨色  
や字の大小の無造作な作多く残念。  
行のバランス、墨の濃淡など参考  
作をよく理解したい。(洋子評)



漢字条幅部 師範 井ノ口春峰  
リズミカルな筆の動きが感じら  
れる。柔毫筆の上質な線が魅力的  
で、明るく爽快感に溢れる作品。

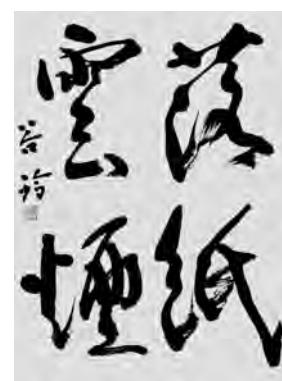


◎漢字条幅部総評 行草書作品が  
大半で、上位の作は、線が上質で  
見応えがあった。日頃の古典学習  
の成果が窺えます。(萬城評)



前衛書部 特選 長澤 紅苑  
躍動感あふれるスケールの大き  
い作。リズムに乗った線と飛沫の  
効果も十分に活かされている。  
◎前衛書部総評 前衛作品の押印  
の位置は極めて大切である。熟慮  
して欲しい。(蓮紅評)

現代詩文書部 特選 佐々木一峰  
文字の大小のリズムが造形的魅  
力と相まって堅治の童謡のメロディー  
が聞こえてくる。余白も効果的。  
◎現代詩文書部総評 余白の取り  
方、文字造形も工夫され、あとは  
線の表情。(弄石評)



ペン字部 師範 落合 敏子  
行書であるが流れ過ぎの線もな  
くしっかりととした字形で格調が高い  
い作品である。今後の精進を期待  
する。(吉祐評)

◎ペン字部総評 行書の流れ過ぎ  
の作品も見うけられたが、全体と  
してはまとまりの良い作品が多く  
だった。

あなたがたは、地の塩である。  
だが塩に塩気がなくなければ、そ  
の塩は、何によって塩味が付けら  
れよう。もはや何の後にも立たず、  
外に投げ捨てられ人々に踏みつ  
けられるだけである。(蒼玄評)

漢字部 師範 小山内谷玲  
のびやかな筆致の行草体でまと  
まりある作。紙面の広がりを感じ  
させゆとりと落ち着きを見せる。  
◎漢字部総評 上級者書体書風の  
工夫を考えた作に好感が持てる。  
下級を含め楷書表現は基礎力を問  
われる。日々の努力を。(大雲評)

今月の

# 特別研究部優秀作品(特選)



175×55cm

佐藤希雲臨

臨書

(大雲)

佐藤希雲

「張猛龍碑」

現代詩文書

(加美)

小川祥燕 「坂村真民詩」



60×140cm

◆濃墨の潤渴を活かし、余白を効果的に配置した構成はリズミカルで楽しい雰囲気を醸し出している。  
(大雲評)

(洋子評)

◆墨を置くように綴り、朴訥な趣が暖かい。作者の意図を理解して寄り添った表現に惹きつけられる。

(蒼玄評)

◆濃淡潤渴がきれいで白が輝く。前半をおさえて後半に山場を持ってきたのも独特な空間構成で見事。

(紅瑠評)

◆濃墨による潤渴の変化、多彩な線質が魅力。右の上下の余白が効果的に明るい作品となつた。  
(蒼玄評)

◆羊毫筆の弾力を活かし、ダイナミックに表現して妙。飛白が独特的のリズムを醸すがややうさい。  
(洋子評)

◆筆の性質と墨色を生かし切り、厳しくも大胆な臨書。こういう積み重ねが創作の土台となり頼もしい。  
(紅瑠評)



前衛書 (白珠) 相内菜摘 「地」

相内菜摘書

◆前衛書の題名には解らない事が多いため、多彩な線が丸で生き物のように艶めいて遊ぶ。間が美しい。  
(洋子評)

◆動きある筆致で全体を3部構成で躍动感にあふれる線条が見事。余白が作品に広がりを与えている。  
(蒼玄評)

(紅瑠評)

◆すっきりと伸々とした張猛龍碑の特徴をとらえて雄大で伸びやかな線である。ゆがみもあり見事な作。  
(蒼玄評)

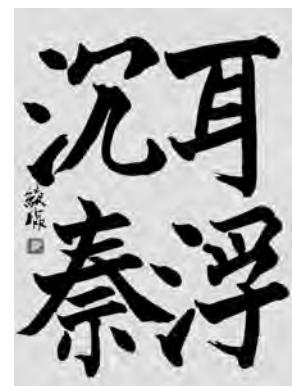
◆北魏方筆の特徴をよく捉えている。剛快でのびやかな運筆、強韌な線。特に横画が筆力充実し見事。  
(紅瑠評)



漢字研究部  
(張猛龍碑)

選評 小浜 大明

今月のホープ作品



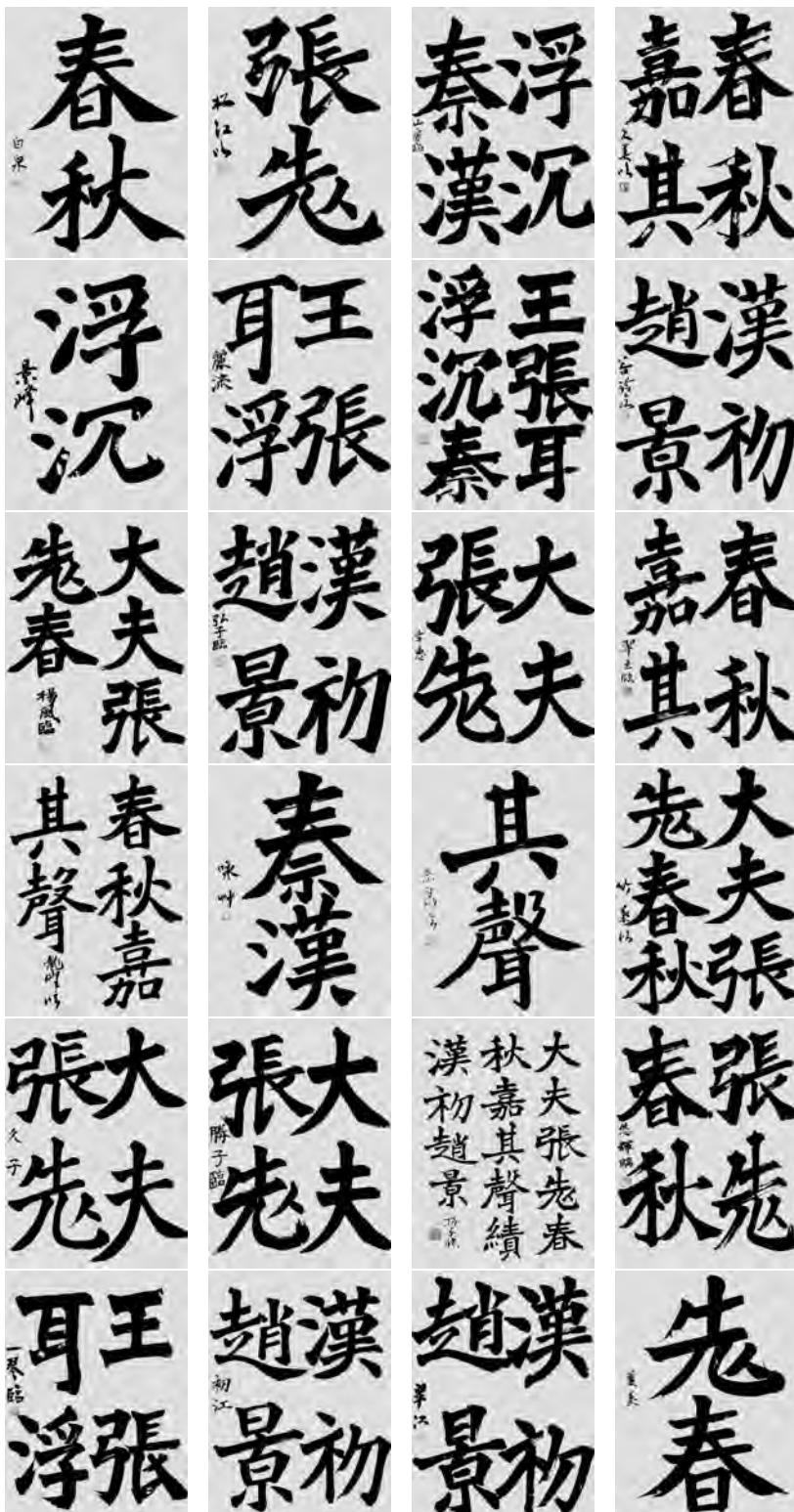
中澤 緹

漢字研究部 特選 中澤 緹  
六朝書の雰囲気を良くとらえ、伸びやかに表現された線が魅力の臨書です。鋭い線の中に込められた、深さと沈着さがあります。正に剛毅の氣性を内にもつた秀作です。結体も安定し、明るさと美しさを感じます。

◎漢字研究部総評

解説に、北魏書の集約された楷書美とあります。上位の作品はその辺を理解して書かれています。

れていています。初期の六朝書と異なり、強さの中に落着きと安定を醸しています。選にもれた作品の中には、力強さのみ強調された作も少なくありませんでした。その他、右肩の転折を、筆を離して書いている作品も目につきました。又、碑の傷(「初」の右上の傷)を書いている作品もありましたが、字典を調べてから書くことは大切です。



一久龍楊景白  
琴子峰風峰泉

初勝咏弘麗桜  
江子艸子流江

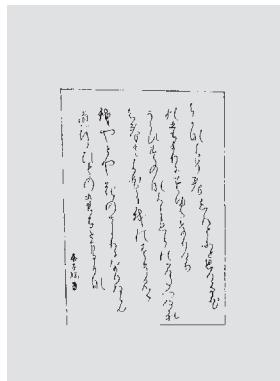
翠哲紫幸藤山  
江子泉惠帛房

夏悠竹翠谷久  
美輝葉玉玲美

か な 研 究 部  
(重之集)

選評 善養寺 紅 風

今月のホープ作品



松本泰子

かな研究部 特選 松本 泰子

大胆で繊細、軽妙な筆致かつ変化にとんだ細線が見事に表現されています。抑揚もしつかりとらえ、艶麗で気品のある作品になりました。

◎かな研究部総評

難しい古筆ですが、総体的によく書かれています。た。変体がな、り・な・を、など誤字を散見！原本を良く見て、読みながら書くことが大切です。

かな研究部成績表

京東昌清白華春菊澄大長京東一春大  
土正高澄明松た竜蕙高芳や大大幕竜樹正  
大八石N正大有正う水松松も  
橋実庵月驚祥月春阪月橋向心汀阪  
気華崎春漢村か泉譽崎蘭ま阪雲張泉原華だ阪街習H華雲秋華る海泉村く  
吉吉大山山富宮深廣平春畠西田田鈴杉神神新嶋鹿猿櫻坂酒齊斎小高北加葛  
田田和崎野澤堀地山岡山岡原中木田保宮行田渡田本井藤藤林武村藤瀬  
由由美喜與上与世美喜  
佐祐惠美聰芝美睦祥佳玉滿称志簾龍里知江つ萩玄惠龍恵日星屋芝道良英清洋津幹洋  
眞翠經香津津祐清幸聰芝美睦祥佳玉滿称志簾龍里知江つ萩玄惠龍恵日星屋芝道良英清洋津幹洋  
眞理眞經香津津祐清幸聰芝美睦祥佳玉滿称志簾龍里知江つ萩玄惠龍恵日星屋芝道良英清洋津幹洋  
翠實子松由美喜幸聰芝美睦祥佳玉滿称志簾龍里知江つ萩玄惠龍恵日星屋芝道良英清洋津幹洋  
實子松由美喜幸聰芝美睦祥佳玉滿称志簾龍里知江つ萩玄惠龍恵日星屋芝道良英清洋津幹洋

庄篠佐齊齋後絶近小小小河小小吳熊国工木吉岸菊菊川河河加門加小小荻小大梅鶴岩岩岩入今猪伊市石石石生五安新  
司田々藤藤藤田藤野藤山林沼野板泉谷峰藤原瀬本池地本岡合納脇藤澤熊原川森木澤剝田田崎谷村又藤川橋崎駒十藤井  
惠木由嘉風  
咏美雅美翠杏舞喜遊淑笙晃初白江豊紫理山輝彩萩善泰南星和順信翠和代玉輝喜簾琴祥博泉洋悠貴理寿紫み正甘萩佳楊藤  
子芳子季暮萩子山子洋代風簾子子美蘭佳屋子雨蕙高麗江扁敬子子陽子子蘿峯代山舟蘆子子花兒扇子子雨學園雪

芳高殊調東華椿玉もあ紅艸綴こ玉 墨千高長蓮上木高紅有大幕正樹秀高白正上雲倉生大秀春た竜秀上玉や澄竹竜香富正生  
選蘭井絽布伯仙翠川くか苑玄布だ川 宣葉崎月紅泉曜陵風秋雲張華原水陵珠華泉溪吉大阪水汀か泉歌泉松ま春扇泉月貴華大  
外  
168 渡吉吉行山山安森森本茂村武宮湊三真松松増本本堀堀福日林林早花丹西永中仲中豊富渡橋土筑塚田田高高鈴鈴菅新  
名連田川平本口鳴本田吉木田藤川 嶋庭重浦田多江井田田高 坂里羽山井村西江田田澤子泉谷井本中玉橋井木木原川  
姓氏名略 親眞妃タタタ万タ喜美シシみ理  
ゆり  
信鑑幸良真雪砂悦藤明真珠惹洋美敏ヶ翠玉佳美和幸法里キ右玉美梅智裕宏ゲ游ノ翠萩憲紀雪宏え耶哲幸小利香昌仁  
かか 納翠子エ子公香蘭風園子エ子ミ賀江子エ子雪枝翠子エ子直華子岡子人枝子溢玉彩子翠子纂江子エ子苑秋子牛生子美

# 〔特別昇級試験臨書課題〕

高 貞 碑 (楷書)

漢字部

第一種 半紙に写真掲載の中から5文字を臨書・それ以外は不可



王・許。龍馬流車。陸<sub>中</sub>／離於陰・鄧<sub>上</sub>。而<sub>下</sub>不以

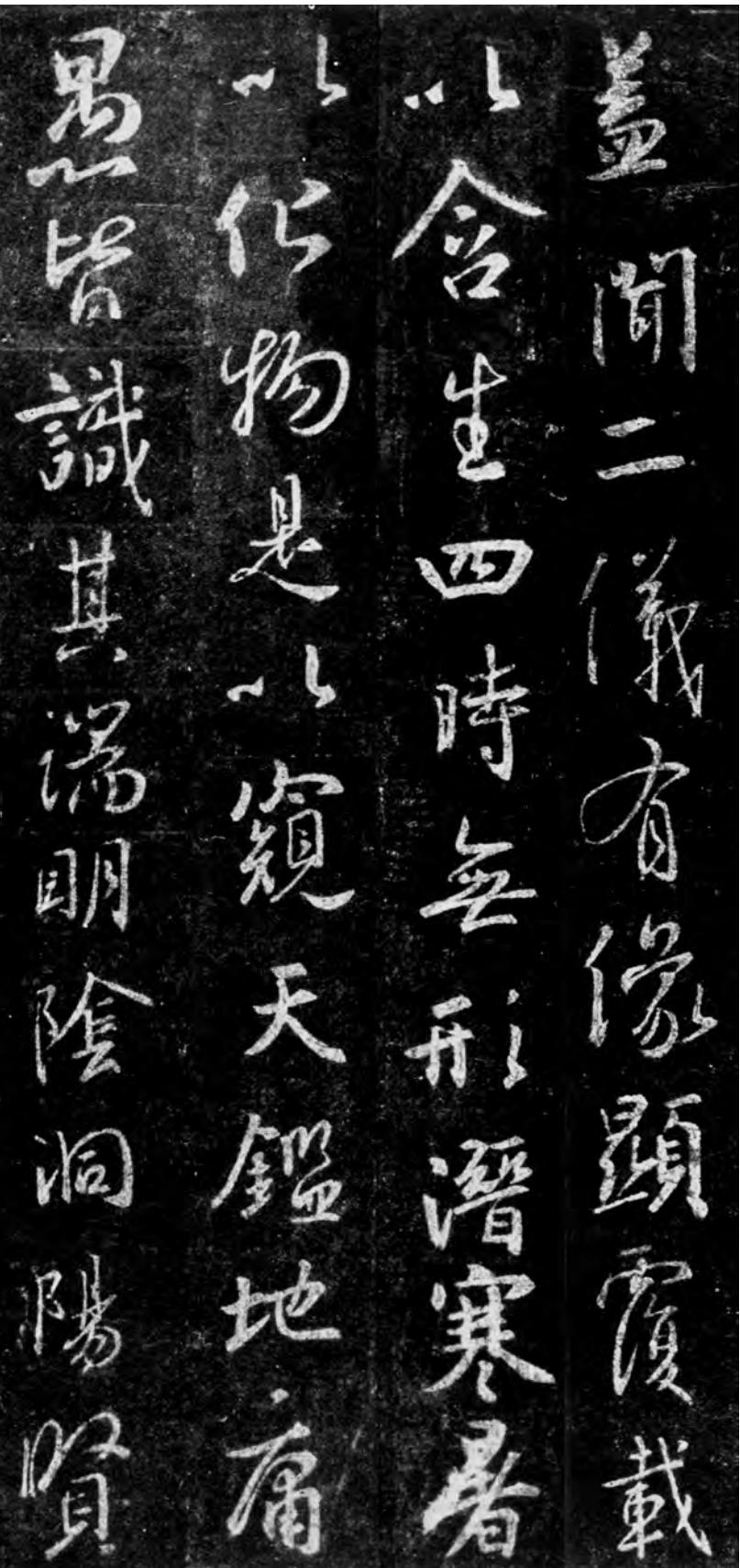
雁塔聖教序 (楷書)

漢字部

第三種 半紙に写真掲載の24文字を臨書・それ以外は不可



運百福而長今。妙道／凝玄。邊之莫知其際。／法流湛寂。挹之莫測



蓋聞二儀有像。顯覆載以含生。四時無形。潛寒暑以化物。是以窺天鑑地。庸愚皆識其端。明陰洞陽。賢

孫保平安也謝之甚遲見卿舅可耳至爲簡隔  
孫保等平安也謝之甚遲見卿舅可耳至爲簡隔

顏勤礼碑（楷書）

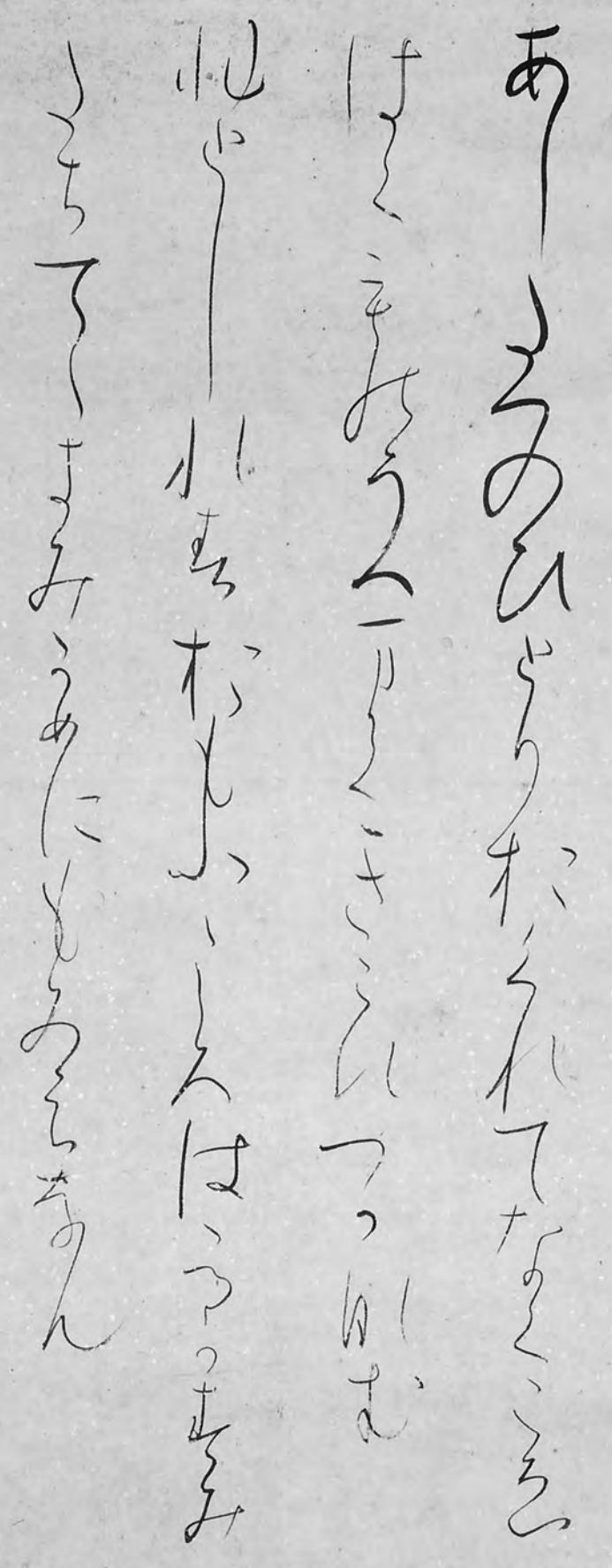
漢字条幅部

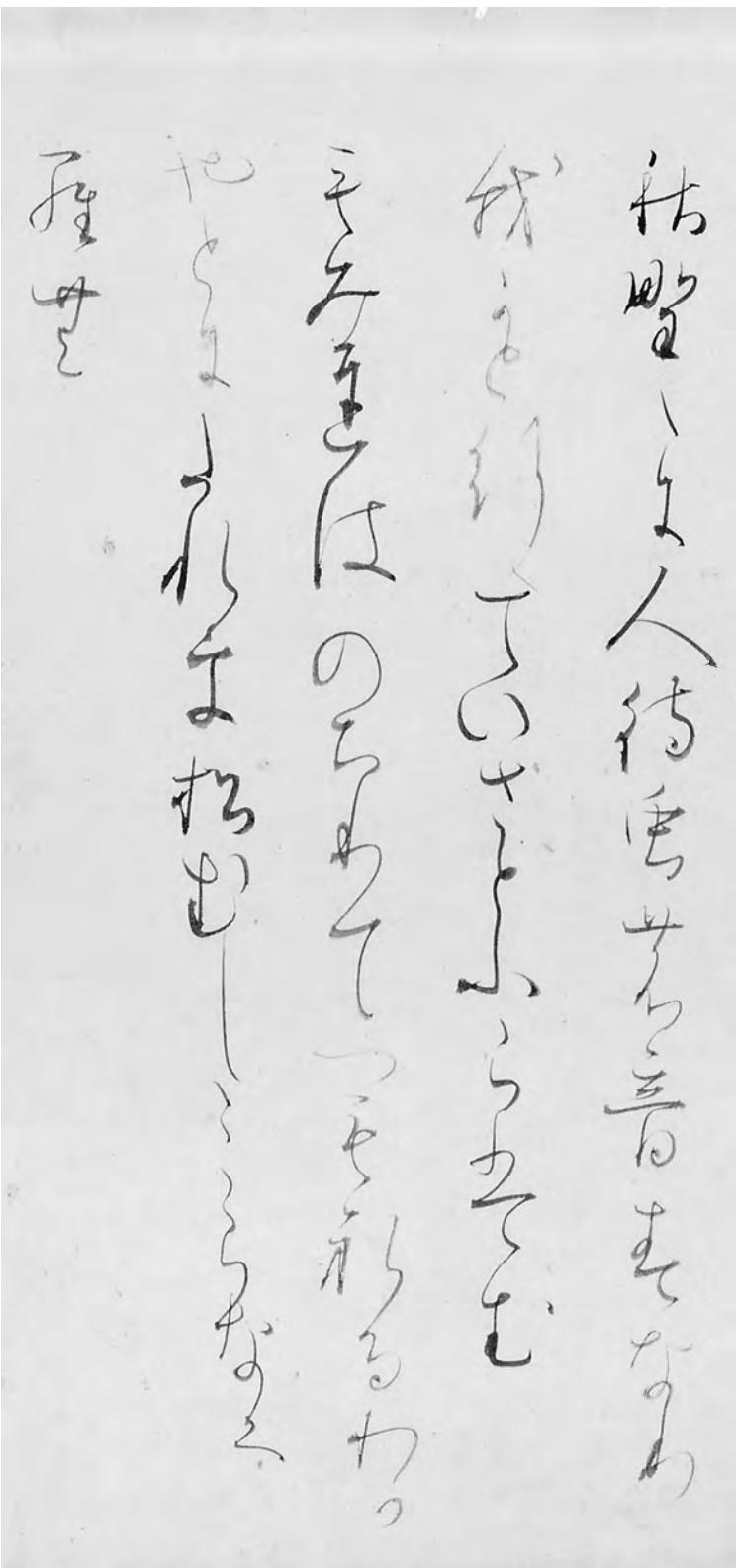
第一種 半切に写真掲載の中から14文字を臨書・それ以外は不可



孫紹通義尉。沒于蠻。泉明孝義。有吏道。父開土。

あしたづのひとりおくれてなくこゑ／はくものうへまできこえつがなむ  
 ひとしづれづ春於おもふこゝろはゝるがすみ／たちでゝきみがめにもみえなん





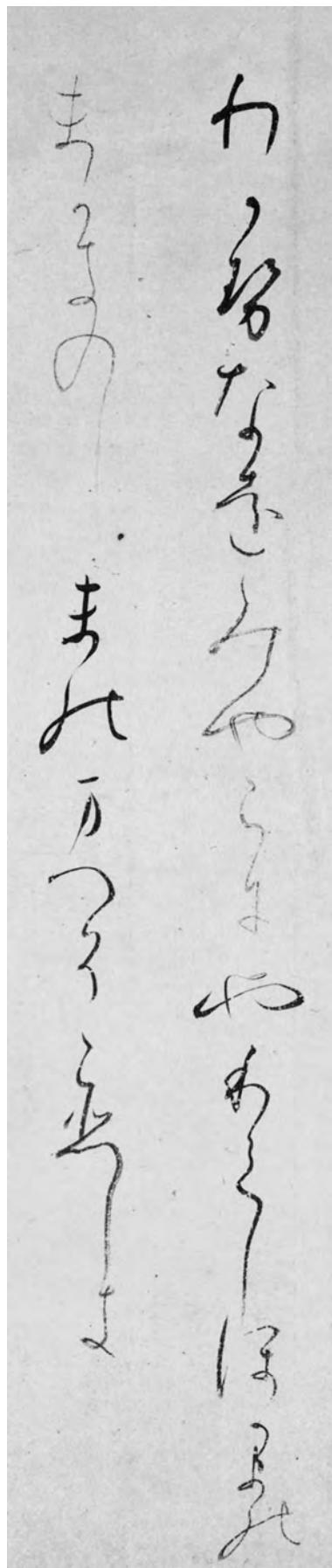
秋野の音に人待虫の音すなり/我かと行ていざとぶらはむ  
もみぢばのちりてつもれるわがやどにたれを松むしこらなくらむ

高野切第一種

かな条幅部

第三種

半切に写真掲載の和歌を書く・それ以外は不可（料紙可）（図版95%縮小）



わがせなをみやこにやりてしほがまの／まがきのしまのまつぞこひしき  
可勢遼 尔利豆 司能支 可支 能万曾 悲支

ご注意!!

## 名前のかき方

どの部も氏名または名、号を書く。  
臨書は〇〇臨と書く。  
印だけでは失格、特にかな・ペン字は注意のこと。